

55 暉峻義等と医学史研究

— 奨進医会にかかわっていた人 —

岡田靖雄

暉峻義等（てるおか・ぎとう）は、進歩的な人であるが戦争協力の陰をもっている、というのが、一般的印象であった。いくつかの場で面識はあったこの人の自宅によればれたことがある。かれの脳軟化発病は一九六二年とあるから、そのすこしあとだったろう。かれが理事長をしていた健康社会建設協会の世話をしてほしいといった要請であったとおもうが、精神科医としての仕事に手一杯の身であるので、ことわった。

ところで今回日本医史学会誕生までの歴史をたどっていて、暉峻が奨進医会にふかくかかわっていたことをしつたので、そのことを中心に、かれの医学史研究をたどってみたい。

日本に労働科学を確立した暉峻（二八八八一—一九六六）

は、兵庫県現高砂市に浄土真宗僧侶の子としてうまれた。

第七高等学校をへて一九一〇年東京帝国大学医科大学に入学したが、翌年結核を発病して療養。一時は僧侶になることもかんがえた。一九一四年再入学して一九一七年同医科大学を卒業。永井潜教授の生理学教室にはいる。

卒業の翌年内務省の保健衛生調査会にはいり東京市内貧民窟を調査した。一九一九年に大原孫三郎が大原社会問題研究所を創立すると、そこに入所。一九二一年倉敷労働科学研究所が創立されると、所長になる。同年海外留学にたつて、ベルリン大学に席をおいて、セミナーなどに出席するとともに、研究所の設備の購入にあたった。またゲッチンゲン医学史文庫（ハーヴェイの血液循環に関する原著をふくむ）を購入した。このときフェルヴォルン文庫も購入した。

一九二三年帰朝して、労働科学の確立につとめた。また一九二四年には岡山藩金川の医師難波抱節旧蔵の「温知堂文庫」を研究所に購入した。

研究所は一九三七年東京にうつり日本労働科学研究所となり、その所長。戦後は労働科学研究所の再建に尽力

したが、暉峻は戦時体制にくみこまれていたため、一九四八年公職追放に指定され、つづいて所長を辞任した。

一九五〇年に健康社会建設協会を設立。また産業医学面で各国との交渉にあたった。七七歳で逝去。

さて、かれの結核を診断したのは尼子四郎である。医科大学に再入学したかれが奨進医会に関係するようになったのは尼子を通じてであろう。授業にあまりでずにいた暉峻は四年生のときさそわれて、富士川游・尼子ほか編集していた青山胤通監修の『日本内科全書』の編集を手つだい、かなりの金ももらった。それだけでなく、一九一八年一月分からは奨進医会の機関誌『刀圭新報』の編集をまかされ、会の事務所も暉峻方におかれた。雑誌の内容も歴史に重点をおいたものから、現代評論におおきくかわった。友人も仲間にひきいれた。解剖の大澤岳太郎教授がドイツ語と日本語とをまぜた電用ドイツ語を医界の用語にせよといったのを、同級だった村田正太（一八八四—一九七四、梅毒の村田反応の発見者）がはげしく批判する論文を『刀圭新報』にかいた。おこった大澤は奨進医会の幹事をことわった。このためだろう、翌年

二月分から同誌は日本医師協会機関誌となった。暉峻はつづいて小川劍三郎の資金で『医人』をだした。これは医学史にかなり重点をおいたもので、第九号は「華岡青洲号」である。だがこれも小川との方針の違いから一〇号でおわった。

このち暉峻は一九二八年の日本医史学会によるハーヴェー三百年記念祭でハーヴェーの遺著について報告した。このときかいたらしい「ゲッチンゲン文庫について」は戦後『労働の科学』に三回にわたり掲載された（一九六四—六五年）。かれが訳した『血液循環の原理』は一九三六年に岩波文庫でだされた。かれはまた、すくなくとも一九四二—四四年と日本医史学会評議員であつた。

（精神科医療史研究会）